



あけましておめでとうございます



初めての熊本研修に行ってきました

11月26日～28日まで熊本県八代市へ1人で研修に行ってきました。
念願だった熊本を訪問し、当店で使用する畳表がどのようにして作られお客様のもとに届くのか、勉強してきたことをご報告させていただきます。

八代平野は、熊本県中南部、八代海北部沿岸に位置する農村地帯で、米の裏作として畳表の原料となるイ草が栽培されていることで有名です。

イ草の栽培量は日本で全国の9割のシェアを誇ります。
私が畳屋さんになってからずっと行きたかった、まさにイ草の聖地です。

ついに行けるぞという興奮で前日はなかなか寝付けませんでした(^_^;



茨城空港から福岡空港へ、そして博多駅から九州新幹線に乗って片道6時間をかけて新八代駅へ到着しました。

駅前で待ち合わせたお世話になっている畳表の間屋さんの従業員の方に案内していただき、11月の田植えシーズンにあるイ草農家さんを訪問していきます。

イ草田植えを体験



まずはさっそく植え付けをおこなっているイ草農家さんの田んぼを訪問しました。イ草農家の小橋さんに教えていただき、今では少なくなった手植えによる植え付けを体験させていただきます。

私は足のサイズが30cmもあるのももちろん合うサイズの長靴があるわけではなく、急きよ素足にビニールを巻いて田植えをしました。冷え込んだ泥の感触をビニール越しに感じます。昔は素足でやることもあったそうで、これも一つの勉強とガマンガマン……！



膝下まで浸かる重い泥に足を取られながら中腰でひたすら苗を植えていきます。だんだんと腰と太ももがしんどくなってくる。フラフラになってあっという間に置いて行かれる私を尻目に、農家のみなさんは楽しそうに談笑しながらポンポンと早いスピードで植え付けを行っていきます。



左の私が植え付けた部分はいつの間にか蛇行して間隔が空いてますね。右の小橋さんが植えた部分は手早くまっすぐに、しっかり等間隔で植え付けられています。

特に活躍されていたのは元気で明るい植え付けの女性アルバイトの皆さんです。この時期にはこのアルバイトさん達が各農家さんを周りお手伝いしていくそうです。まさに八代のイ草作りを支える大きな戦力で、農家さんの田植えの計画はこのアルバイトさんのスケジュールに左右されるそうです。

体力には自身がありました、少し手伝っただけで腰が痛くなりました。この大変な作業を一週間ほど行い苗を植え付けていくそうです。

イ草苗の株分け



次はイ草農家の草野雄二さんのお宅を訪問し、イ草苗の株分けを見せて頂きました。草野さんの畳表は今まで何度も使わせていた事がありますが、お会いするのは初めて。私と同世代の後継者の息子さんもおり、ご家族みんなでイ草作りをされているとのことで茨城から来たとお伝えすると皆さん快く迎えてくださいました。



苗床で育てた苗を掘り起こし、専用の機械で株分けをしていきます。



日差しが入らないように暗い作業場の中で奥様が一人黙々と機械を操作していました。



カットして数本ずつに株分けした苗は後日に機械を使って本田に植え付けていきます。私が体験した手植えより今は機械植えが主流となっているそうです。

作業場の裏の畑に行くと、草野さんと息子さんご夫婦がレタスの収穫を行っていました。茨城のレタスも有名ですが、熊本のレタスもみずみずしくてとても美味しそうです。畳の需要の減少でイ草の栽培量が減り、それを補う形でレタス、トマト、イチゴなどの露地野菜の生産をされる農家さんも多いそうです。

畳表の製織



次は松川澄夫さんのお宅を訪問し、畳表の製織工程を見学させていただきました。松川さんの作られた畳表も問屋さんからその品質が高く評価されています。お伺いした時はご家族みなでお忙しそうに作業をされてましたが、突然の訪問にも関わらず快く迎え入れてくださいました。



長さもまばらな刈り取ったイ草を機械に入れ、長さごとに選別していきます。一番右の写真のイ草は左から右の束になるにつれて長いイ草です。



短いイ草は畳表として使う部分に根っこと穂先の黄色い所が入ってしまうために下級品になり、長さのあるイ草ほど真ん中の青い部分だけが使えるので上級品になります。



選別したイ草を機械に入れ、水蒸気で加湿します。この加湿の具合によって畳表の色調や表情が変わるためとても重要な工程です。その日の温度や湿度によってイ草の声を聴き、加湿の塩梅を微妙に調整していきます。

その後、奥様が一本一本手作業で選別し、変色や傷が無いかチェックしていきます。地道な細かい作業ですが、畳表の品質を支えるためには大切な作業です。



いよいよ選別したイ草を製織機で畳表にしていきます。
小屋の中で何台もの製織機が稼働して畳表を織っていく姿はなかなか迫力があります。
1台で作れる畳表には限りがあるため、早いときは朝の5時から稼働させるそうです。
折れたイ草などが入ると機械が止まってしまうため付きっきりでいなければなりません。



ついに松川さんの畳表が完成しました。
何度も完成品を見ている私も、ここまで手間暇かけて畳表を織りあげていく工程を見ていると仕上がった畳表がとても貴重な品に見えてきます。
この感動を茨城のお客様にもしっかりとお伝えしなければと思いました。



見学後にご自宅の和室でお茶をいただきながらイ草作りのお話をゆっくり聞かせていただいていると、ふと日に焼けた畳の色がとても綺麗なことに気づきました。

「良い畳表は時間が経ち、日に焼けて黄色くなくても綺麗なんですよ。
私たちはこの色を飴色と呼んでいます。」
と教えていただきました。

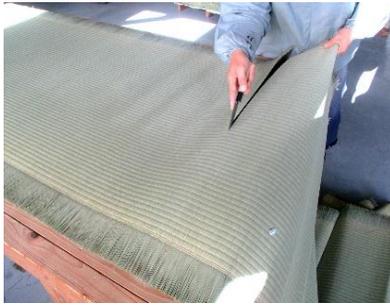
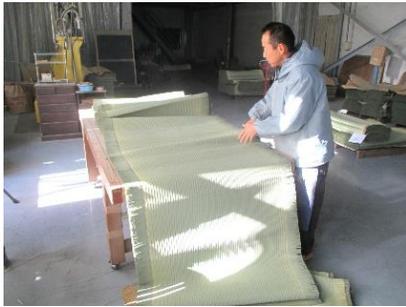
たしかにムラも無く、べっこう飴のように光沢があって艶やかな色をしています。
人肌に近く、見ていて落ち着くようなとても暖かな色合いです。
極端な例ですが、右の中国産畳表のように日焼けした時に出る黒い筋が一切ありません。

大切に育てた国産の良い草だけを使っているのだからこんな綺麗な色になるのですね。
「良い畳表と悪い畳表は最初が同じように綺麗に見えても、使えば使うほどその違いがわかってくるんです。」
畳表のプロである問屋さんがおっしゃっていた事の意味がこの時良く分かりました。

畳表の間屋さんを訪問



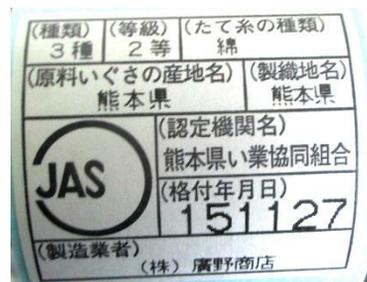
次は当店に畳表を卸していただいている間屋さんを訪問しました。契約農家さんから買い取った畳表がここに集まり、全国の畳屋さんに配送されます。作業場の中はたくさんの畳表があり、イ草の香りが充満していましたが、これでもかなり少ないようで繁忙期はこの倉庫いっぱい畳表が積み上げるそうです。農作物である畳表は紫外線や湿気にとてもデリケートなため日よけをして、室内の温度・湿度は厳重に管理されています。



まず畳表を注文されたサイズに裁断していく作業を見せていただきました。畳のサイズは関西、中京、関東など地域によって異なるため、発注されたサイズに合わせて一枚一枚手作業で切っていきます。裁断した後は解れないように端を糊止めします。



そして畳表を作った農家さんの顔写真やお名前などの情報が詳しく掲載されている生産者証明書を添付。



次はJAS（日本農林水産規格）という畳表の規格検査を見させていただきました。登録認定機関から認定された業者のみできる畳表の品質・等級に関する大切な検査です。



まずは畳表の水分量の計測。

水分を含みすぎるとカビの原因になりますので、一定の基準値を超えてないか計測します。そして充分な量のいぐさを織り込むことが畳表の品質（緻密さ、強度等）を保証することになるため、重さを計測してイ草の本数を確認します。



着色料の検査では布で畳表の表面をふき取り青色など着色剤がついていないかを確認。多くの中国産畳表とは違い、着色剤を使っていない無着色畳表であるかを確認するのです。

各検査で測定した記録は規定の年数の間は保存しておかなければなりません。このような厳重な品質検査を経て、当店に安全な畳表を送っていただいているのですね。



検査した畳表は出荷先ごとに整理され、最後にキズや変色が無いかを担当者がしっかり目で確認していきます。

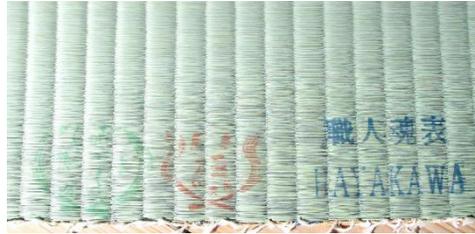
同じ時期、同じ生産者でも畳表は自然の農業製品であるため多少色合いに違いが出ます。そのためお客様のお部屋のお畳にムラが出ないように、なるべく同じ畳店に同じ色合いの畳表を揃えて出荷します。



梱包機で梱包し、社長自らフォークリフトで運送屋さんに積み込んでいただきました。こうして農家さんが作った畳表は当店に届けられるのです。



見学最後に、目利きの為には最高級の畳表を見ていったほうが良いとのこと、最高級の畳表を見せていただきました。
八代でもトップクラスの生産者である早川猛さんの作った最高級畳表「ひのさらさ」です。



畳表には「職人魂表 HAYAKAWA」の刻印。
生産者1人1人イ草の育て方や畳表の織り方が違うからこそ、名人といわれる農家さんになるとそのお名前が畳表のブランドになるのですね。



上の普及品の糸引き畳表と比べると違いは一目瞭然です。
イ草の長さや触れた厚みが明らかに異なり、黄色い部分や色ムラが無くとても綺麗です。
社長さんによれば日焼けしても黒い筋や変色も無く、写真のような綺麗な節色になり、使用すればするほど安い畳表との違いが良くわかってくるとのことでした。



3日間の研修でずっと案内をしてくださった従業員の本田さんと一緒に記念撮影。

「問屋は農家さんと畳屋さんの橋渡し役」

社長がおっしゃっていたように、生産者とコミュニケーションをとりながら品質を厳重に管理し、1年を通して畳表を供給してくれる問屋さんがあるからこそ、私たち畳店がお客様に安全な畳を納品できるのだと知ることができました。

熊本の名所の畳を見学

2日間かけての農家さん訪問と問屋さん見学を終え、最終日は社長の勧めで最高級の畳が使われている熊本県内の名所を見学することになりました。



まず向かったのは八代市千丁町にある「せんちょう図書館」です。
「畳を見学するはずがなぜに図書館？」と思いますが、入ってみると図書館の中に畳が！



児童書コーナーが畳敷きで、子ども達が畳の上で本を読みながらくつろいでいました。茨城の図書館で畳を見ることなんてありませんが、これは良いアイデアですね。ここで本を読んで育った子供たちはきっと畳が大好きになるんだろうな思いました。

せんちょう図書館を後にし、次は車で八代市から熊本市へ。



熊本市は熊本県の県庁所在地であり、県内人口の約42%にあたる約74万人の市民が住む日本最南端の政令指定都市です。

九州では、福岡市、北九州市について、3番目に人口が多い市ですが、「水と森の都」の代名詞で知られるように都市化が進みつつも自然と共存した街づくりがなされている景観の美しい街です。

都市部ですが緑豊かな熊本城を背景に、街中を路面電車が走っていく姿はどこかノスタルジックな雰囲気を感じます。



向かったのは水前寺成趣園（通称：水前寺公園）です。
鷹狩りの際にこの地を気に入った熊本藩細川氏の初代藩主細川忠利が1636年頃に築いた「水前寺御茶屋」から始まり、第3代藩主綱利公が大規模な造成を行い完成した肥後細川家ゆかりの庭園です。
熊本市出身で歌手の水前寺清子さんの芸名の由来としても知られています。



回遊式庭園という園内をぐるりと巡りながら鑑賞することを意識して造られた庭園なので池の周りを巡りながらゆっくりと庭園を鑑賞することができます。



眺めていると池の水の美しさに目を惹かれます。
阿蘇山でろ過された雨水が地下水となり湧き出したもので、環境省の日本の名水百選にも選ばれているそうです。



園内にある出水神社は西南戦争後に焼け野原となった熊本で、旧藩主を慕った旧藩士達により創建され、細川家歴代藩主とガラシャ夫人が祀られています。

立派な本殿を眺めていると何やら厳かな雰囲気ので多くの中を見えています。



覗いてみると、ちょうど神前結婚式をしているところでした。
こんな美しい庭園のある神社で結婚式を挙げるのは一生の思い出になりそうですね。
境内にある飲めば長生きできる「長寿の水」は、県外から神水をわざわざ飲みにくる人も多
い知る人ぞ知る湧水スポットだそうです。



そしていよいよお目当ての畳のある「古今伝授の間（こきんでんじゅのま）」へ。
園内でひと際目を引く茅葺屋根の建物は今から400年前に京都御所内にあったものを、
大正元年（1912）に水前寺成趣園に移転したそうです。
この部屋で細川家初代の細川幽斎公が桂宮智仁親王に「古今和歌集の解説の奥儀」を伝授
されたことからこの名前がつけました。



中には畳の部屋があり、休憩場所として多くの観光客がくつろいでいました。
毎日たくさんの観光客が上がるので痛みはありましたが、使われているのはやはり最高級
の熊本産畳表「ひのさらさ」です。



和歌の神髄を伝えた日本唯一の宮家の学び舎に思いを馳せながら、畳の上に座り、そこから望む庭園を眺めているととても心が落ち着きます。



こちらでは抹茶と茶菓子を食べることもでき、観光客の中国人の皆さんが畳の上で正座をしながらガイドさんにレクチャーを受けていました。
テレビでは中国人観光客はマナーが悪いとよく聞きますが、水前寺公園で出会った中国人の皆さんは真摯に耳を傾け日本文化をリスペクトする姿勢がとても伝わってきました。
海外の方が日本の文化に触れるこういった姿を見るのはとても嬉しいですね。



水前寺公園の見学を終え、次はいよいよ3日間の研修のラスト。
熊本人気ナンバー1の観光スポットである熊本城にやってきました。



御殿への正式な入口である「闇り御門」という地下通路を潜ります。
全国のお城でもこのような地下通路があるのは珍しいとか。
なんだかゲームの世界に迷い込んだようなワクワク感があります(^0^)



熊本城は朝鮮の虎退治で有名な猛将で、築城の名手であった加藤清正公が築城し、日本三名城の一つに数えられています。
武功だけでなく、熊本では農業政策でも実績を上げ、現在に至るまで「清正公（せいしよこ）さん」と呼ばれ肥後人に大変崇拜されている大名です。
ちなみに、「隈本」という地名が「熊本」に改名されたのも、「勇ましいから！」という清正の意向だったと言われています。



熊本城の石垣は、地面付近は勾配がゆるく上に行くにしたがって勾配がきつくなる独特なもので、武者返し（むじゃがえし）や「清正流石組」などと呼ばれています。石垣の下の方は30度程度と緩やかですが、上の方は垂直に近い絶壁になっています。見上げるとそびえ立つように巨大に見え、敵を寄せ付けぬ迫力があります。



天守閣に入ると中は博物館になっていて熊本城の様々な資料を見ることができます。



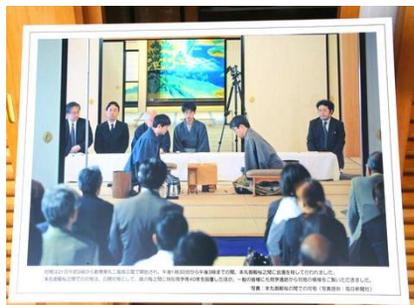
最上階まで登ると大天守閣が展望所になっており、熊本市内はもとより遠く阿蘇の山並みまで見ることもできます。

こうして熊本の街並みを見下ろしていると大名になったような気持ちになりますね。お城マニアではないですが、ちょっとハマる人の気持ちがわかりました。



そしていよいよ本題の熊本城の大広間の畳見学へ！

天守閣の隣にあり、行政の場、生活空間として利用された本丸御殿に入ります。大広間はいくつかの部屋に分けられていて、手前から「鶴之間」、「梅之間」、「櫻之間」、「桐之間」、そして一番奥が藩主の部屋とされる「若松之間」です。これだけ大きい広間を見れる機会もないのでなかなか壮観です。



将棋の名人戦も行われたようで、羽生善治さんの写真も飾ってありました。



使われている畳表は特に高品質な粒の揃った草を厳選し、厳しい加工基準で織り上げられた熊本の最高級畳表「ひのさらさ」です。
 本丸御殿大広間の復元工事がされ7年ほどたっていますが、人の出入りがなくともありとても美しい飴色に日焼けしていました。
 「畳は新しいほうが良い」と言われますがそんな概念を覆すように、熊本城の畳は時間がたつほど魅力が増すような、暖かで艶やかな色合いがとても美しかったです。



そして奥が藩主の間である「若松之間（わかまつのみ）」



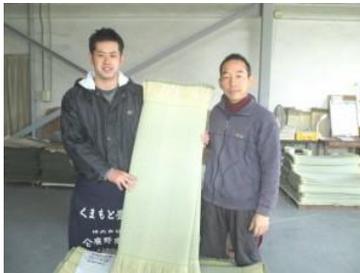
その隣にあるのが本丸御殿の中で最も格式の高い部屋で、藩主会見の場である「昭君之間」（しょうくんのま）です。
 さすが殿様のお部屋だけあって豪華絢爛ですね。
 壁には中国の故事に登場する「王昭君」という絶世の美女の物語が描かれています。
 「昭君之間」は「将軍の間」の隠語で、加藤清正が豊臣秀吉の子である秀頼に万一の事があった場合に、迎え入れる為に作った部屋とされているそうです。



熊本城の見学を終え、3日間の研修の最後に天守閣と記念撮影。
観光地で畳ばかり見てる変な奴だと思われたと思いますが、とても勉強になりました。
多大なご協力をいただき、初めての熊本研修は無事に終わりを迎えることができました。
一人きりの研修でしたが皆さんのおかげで貴重な学びを得ることができました。



終わってみて感じたのはとにかく「来てよかった」ということです。
いくら情報として知っていても、イ草作りの現場に行ってお話を聞き、自分の目で見てみなければわからないことがたくさんあるのだと知りました。



私たち畳屋が使う一枚の畳表には、生産者さんや問屋さんなど、熊本の方々のたくさん想いが詰まっているんだとわかりました。
お客様に畳をお届けするリレーのアンカーとして、今回得た経験と国産畳表の素晴らしさを茨城の皆様にはっきりお伝えしていこうと思います。



見習いの身として、今回お世話になった方々に恩返しできるよう、今後も畳屋修行に精進していきます。

また、これからも熊本を引き続き訪れていきたいと思ひます。
熊本の皆様、3日間ありがとうございました！



高野好見畳店



お読みいただきありがとうございました。

(有)高野好見畳店

〒319-1106

茨城那珂郡東海村白方607-2

Tel:0800-800-5193 Fax:029-282-3520

Mail:t-koya@ark.ocn.ne.jp

<http://koya-tatami.com/> 東海村 畳で検索

白方小学校
白方コミセン

看板

ここ

ブログ「四代目修行日記」、Facebookページ更新中！